主日礼拝説教「もてないより、もてたい。もてなされるより、もてなしたい」
日本基督教団石神井教会　2019年8月18日

**【旧約聖書日課】出エジプト記　22章20～26節**

20寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。あなたたちはエジプトの国で寄留
者であったからである。
21寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。22もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたし
に向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。23そして、わたしの怒りは燃え上
がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。
24もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対し
て高利貸しのようになってはならない。彼から利子を取ってはならない。25もし、隣人の
上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。26なぜなら、それは彼の唯一の
衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。もし、
彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。わたしは憐れみ深いからである。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　12章9～21節**

9愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、10兄弟愛をもって互いに
愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。11怠らず励み、霊に燃えて、主
に仕えなさい。12希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。13聖なる者
たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。14あなた
がたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりませ
ん。15喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。16互いに思いを一つにし、高ぶらず、
身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。17だれに対し
ても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。18できれば、せめ
てあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。19愛する人たち、自分で復讐せず、
神の怒りに任せなさい。「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われ
る」と書いてあります。20「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませよ。
そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」21悪に負けることなく、善をもっ
て悪に勝ちなさい。

**【福音書日課】ルカによる福音書　10章25～42節**

25すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何
をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26イエスが、「律法には何と
書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27彼は答えた。「『心
を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさ
い、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28イエスは言われた。「正し
い答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29しかし、彼は自分を正当
化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30イエスはお答えに
なった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追い
はぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31ある祭司がた

またまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。[32]同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。[33]ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、[34]近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。[35]そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』[36]さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」[37]律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

[38]一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。[39]彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。[40]マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」[41]主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。[42]しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

**「希望をもって喜び…」**

「今日はおかしな説教題が付いている」と思いながら、礼拝においでになられた方がいらっしゃるかもしれません。そのことを最初にお話ししないと、落ち着かないでしょう。わたしが 30 年来注目している社会学者が 7 年ほど前に若い人に向けて出版された『きみがモテれば、社会は変わる』という著書があるのです。書名は少しふざけていますが、大真面目な内容の本です。ちなみに、著者はキリスト教にも関心のある人のようです、キリスト教的考え方を思わせるところも少なくありません。この著書の書名を借りて、今日は皆さんにまず、「教会がモテれば、社会は変わる」と宣言してから、御言葉に聞きたいと思ったのです。

今日の使徒書日課（ローマ 12 章）には、毎週の「週報」の表紙に掲げている年度標語聖句（ローマ 12:12）が含まれています。

使徒はここで、実に具体的なキリスト者としての実践のあり方を示そうとしています。わたしたちが、日々の生活の中で互いにどのような関係を築いていくべきなのか。信仰者同士で、あるいはそうでない者と、どのように関わりを持っていくべきなのか。使徒の教えは、きわめて実践的なものです。それを敢えて要約するならば、すべて他者に対して敬意をもって接する、というのが使徒の教える態度だと言うことができるかもしれません。実際には、それがいかに難しい態度であり、実践しがたいものであるか、使徒はもちろん、知っていました。それでもこのようなことを使徒が繰り返し語り、教えたのは、このような実践からこそ社会が変わる、キリスト者の小さな人間関係の実践から世界が変わる、世界が救われると、使徒が信じていたからです。

**「すべての人と平和に…」**

平和を祈る季節を、わたしたちはこの国の社会と共に過ごしてきました。8 月 15 日をもってその季節は一区切りが付けられていますが、わたしたちの歩みの中で「平和」への祈りが終わりになるわけではありません。使徒が「**できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい**」と勧めたのは、わたしたちの日々の実践としてそうすべきだからです。

もちろん、多くの皆さんは、日々の生活の中で関わる多くの人と、平穏な関係を持たれていることでしょう。常にだれかと争っているとか、いつも誰かから悪意を向けられてそれに応じなければならない状態にあるという方のほうが、少ないかもしれません。あるいは、たとえ人と衝突することが起こりそうになっても、使徒が「**自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい**」と勧めていることを思い起こして、関係の悪化がエスカレートしないように自制し、踏みとどまっている、という方もきっとあると思います。

そのようにして、心穏やかに「平和に暮らす」ことを心がけていらっしゃる方に、敢えてそれ以上のことを語るべきではないかもしれません。けれども、使徒が教えているのは、自分一人心穏やかに平和に暮らすことではありません。使徒はむしろ、この実践は「**苦難を耐え忍ぶ**」こと、「**たゆまず祈**」ることなしには為し得ないことと言っているのです。何となれば、それは、本音を言えば「**燃える炭火を彼の頭に積**」んでやりたいと思っている相手に対して、「**飢えていたら食べさせ、渇いていたら飲ませ**」るという実践だからです。しかし、そのようにしてこそ「愛は偽りではなくなる」と使徒は言っているのです。

このような使徒の教えは、もちろん、主イエスの教えに根差しているのです。

福音書日課（ルカ 10 章）で、主イエスは、律法の専門家との対話の中で、「愛すべき隣人とはだれか」という問いにお答えになられています。彼のその問いの裏側には、「愛さなくてよい敵」が想定されているということでしょう。そのような問いは、わたしたちに無関係とは言えません。わたしたちは、あからさまに「敵」を作ったりはしないかもしれません。けれども、無数の「関わらない相手」を作ってきたのではないでしょうか。できるだけ関わらない相手を多くすることで、自分の責任で関わる相手を限定し、その中で「平和」を保とうとしてきた、ということはなかったでしょうか。

もちろん、わたしたちは、自分の能力を超えてすべての関わりを持った人と関係を続けていくことはできません。わたしたちが関われる相手の数は、限られています。しかし、そのとき、わたしたちは、その数を限るために、どんな取捨選択をしてきたのか。本当は、どのような取捨選択をすべきなのか。主イエスがここでお語りになられた「善いサマリア人のたとえ」は、そのことを問いかけているのではないでしょうか。

「敵の隣人となる」という選択を敢えてする。その主イエスの教えを、使徒は、真正面から受けとめて、あの勧めを語っているのです。とは言え、使徒も主イエスも、最初から難しい実践を求めているわけではないと思います。

**「行って、あなたも…」**

使徒はまず、「**聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい**」と勧めていました。「**聖なる者たち**」というのは、広くはキリスト信徒らのこと、狭くは宣教の働きに仕える使徒たちのことです。その「貧しさ」と使徒が言うのは、経済的な貧しさのことというよりも、「まだ為すべき務め」のことです。平たく言えば、教会の交わりの中で、互いの担っている働きを憶え、分かち合い、支え合いなさいということです。

教会の中で労苦して奉仕してくださっている人たちがあります。そのような方たちのことを、多くの皆さんが心に留めてくださっていると思います。感謝を伝えてくださっている方もあるでしょう。けれども、実のところ、自分はその責任を負わなくて済んでよかった、と内心で思っているということは、ないでしょうか。「わたしにはできないから」と言い訳しながら、奉仕してくださる方に対しては無理な要求を突き付けてしまう、というようなことがなかったでしょうか。そのようなことがあるとすれば、今度は逆に、多くの働きを担ってくださっている方の中にも、葛藤が生まれる温床にもなるのです。

使徒は、そのようなことが教会の中でも起こることを知っていました。だからこそ、そこでまずわたしたちがどのような互いの関係を築いていくことができるのかが問われているのだと、繰り返し示しているのでしょう。

福音書日課で「善いサマリア人のたとえ」の後に続いて物語られている「マルタとマリア」の出来事は、マルタ自身が後の教会で証しして語ったことがもとになっていると考えられます。そのとき彼女は、妹のマリアにも自分と同じようにもてなしの働きを手伝わせたかったのです。いいえ、マルタは、本当は自分もマリアのように主イエスの足もとに座って話を聞きたかったのかもしれません。その葛藤を抱きながら、マルタは、マリアにではなく主イエスに訴えたのです。そのとき、主イエスは告げられました、「**マルタ、マルタ、あなたは多くのことを思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである**」。マルタは、多くのことを為したかったのです。そう、「神を愛し、隣人を愛しなさい」と教えられていたマルタは、「主イエスを愛し、客人をも愛そう」としたのです。けれども、主イエスは言われました、「あなたがすべきことは、一つだけだ。それで十分だ」と。

これは想像ですが、このとき、マリアのほうには、そのような葛藤はなかったのでしょうか。もしかすると同じような葛藤があったのではないでしょうか。その葛藤を訴えったならば、主イエスは、マリアにも同じように言われたのではないでしょうか、「あなたがすべきことは、一つだけだ。それで十分だ」と。

主イエスが「平和」を実現してくださるとき、皆が同じようになるのではありません。それぞれが、自分の為すべきことに徹するのです。他の者の実践と比較する必要はないのです。「あなたも、行って、隣人になりなさい」と、主は言われます。どのように「隣人」になるのか。だれの「隣人」になるのか。それは、一人ひとりに示されるのです。